

降誕節第6主日 説教 「深き淵にて」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2024年2月4日

イザヤ書 58:6-10

藤沢教会がこの地に設立されたのは、今から106年前の1918年、大正7年2月7日のことでした。ただ、当然ではありませんが、その当時のことを直接見聞きした者は私たちの中には一人もおりません。しかし、教会設立の様子を知っている者がこの場にはいなかったとしても、同じ信仰に生きているのが私たち藤沢教会であるのです。なぜなら、使徒パウロがコリント教会の人々に向かって「あなたがたは、キリストが私たちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく活ける神の霊によって、石の板ではなく、人の心の板に書き付けられた手紙です」と語るように、キリストを証しすべく歩む私たちは、当時も今も、同じようにこの地に御言葉を刻み続ける者でもあるからです。従って、私たちが毎年創立記念礼拝を献げるといふことは、そういう意味で信仰の原点に立ち帰って、自らのその使命を確認することでもあるのでしょうか。ただし、先達とその志を一つにしつつも、すべてにおいて、私たちは同じであるわけではありません。

使徒パウロがローマの教会の人々に向かって、「私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」と語るように、私たち藤沢教会が106年の歴史を有しているということは、つまりは、今日を生きる私たちには、それだけ希望が蓄積されているということです。従って、106年前の人々よりも私たちの方が、御言葉の語るこの希望をより強く思うことができ、それゆえ、私たち藤沢教会にとっての106年の歩みとは、去年よりも今年、今年よりも来年といった具合に、希望を強くするための歩みであったということです。ですから、この希望は、創立記念日を迎えたこの日だけに限って与えられているものではありません。365日、私たちの頭の上に燦々と輝き続けているのが御言葉が語り、また、私たちに与えられているこの希望でもあるのです。しかし、私たちは普段の生活において、どこまでそれを意識しているのでしょうか。私た

ちの心の内にあることは、むしろそれとは反対ということはないでしょうか。しかし、そう思うことには一理あるようにも思うのです。それは、コロナ下以降、あらゆる面で、教会はそれまでとはまったく異なる様相を呈するようになったからです。そして、それは、私たち藤沢教会だけに限ったことではありません。

日本キリスト教団が出している「教団年鑑」という本がありますが、そこには、各教会より報告された前年の実情が、つまり、牧師、役員の名に加えて、会員数、諸集会の出席者数、財政状況などのデータが記載されています。そして、そこで報告された昨年度の実績は惨憺たるものがありました。しかし、そうした中で、私たち藤沢教会はよく持ちこたえているとも言えるのですが、ただ、他と比べ、数字の上で多少上回っていたとしても、日本基督教団の全教会が同じ状況にあるのは間違いありません。そして、それは、日本基督教団だけのことではなく、カトリック然り、聖公会然り、ルーテル教会然り、福音派然り、日本のキリスト教会のほぼすべてが同じ状況に置かれているのです。ですから、昨年のことありますが、福音派の神学校である東京基督教大学がある一つの見解を示したのです。それは、日本のキリスト教が停滞期から衰退期に入ったというものでありますが、それについては、恐らくは、内部的にも相当議論があったはずですが、その勇氣に敬意を表したいと思うのですが、ただ、この見解は、それだけにまた日本中の教会に大きな衝撃を与えることとなりました。それは、私たちが衰退を認めざるをえない状況にあるということは、つまりは、従来手法を用いるだけでは、今のこの状況は打開できないということを意味しているからです。

従って、このような状況の中で、去年よりも今年、今年よりも来年と、右肩上がりに希望が増し加わっていると語ることは現状をまったく顧みない、愚か者の所業だとも言えるのでしょうか。では、これを聞いて

皆さんはどう思ったのでしょうか。その通りと思うのか、はたまた、いや違うと思うのか、いかがでしょうか。ただ、その通りと思っても、いや、違うと思っても、ただ思っているだけでは、それで何かが大きく変わることはありません。変わるためには、実際に行動に移すしかないのですが、事実、去年より今年、今年よりも来年と、戦後、私たちの国においてキリスト教会が右肩上がりにその数を増やしてきたのは、私たちが神様のご委託に応え、実際に行動してきたからでもありました。つまり、御言葉を信じ、御言葉に生きた結果として今があるということでもあります。それは、まさに、この日、私たちに与えられている御言葉を私たち藤沢教会が、また、私たちだけでなく、焦土と化したこの日本という国を再建しようと御言葉を信じ生きた大勢の主にある兄弟姉妹が、この日の御言葉を大切に大切に毎日を生きてきたから、今あるのは、間違いなくそれゆえのことでもあったのです。

ところが、1990年頃にピークを迎えて以降、日本基督教団の教勢は緩やかに下降線を辿り、そして、日本のキリスト教会全体が軌を一にするかのように衰退期を迎えたわけですから、当然のことではありますが、私たちは沈みゆくのを座して見つめているわけには参りません。この状況を変えるべく、何かをしなければならぬ、そして、それが伝道ということでもあるのですが、ただ、日本のキリスト教会が一丸となって伝道を推進した結果として今この時がある、一方ではそれも確かなことであるのです。では、そうなったのは私たちの努力が足りなかったからなのか、もちろん、そうではありません。なぜなら、惜しみなく自らを献げ続けてきたのが日本のキリスト教会であったのは間違いのないことだからです。しかし、それだけにまた、停滞から衰退というこの言葉は、日本中の教会に衝撃を与えることになったのです。しかし、このことは、ここ20年来、私たちが薄々感じていることでもありました。

二千年期に入り、伝道献身者の数は毎年減り続け、それに反比例するかのように、神学生の平均年齢は大きく引き上げられることとなりました。その結果、教会の将来

を担う次の世代の活躍の幅が確実に狭まってきているのは皆さんもご存知のことと思います。しかし、この日、私が、去年より今年、今年よりも来年と、御言葉が語る希望が増し加わっていると皆さんに申し上げているのは、日本のキリスト教会が抱えている今のこの困難な状況を打開すべく、何を変えなければならぬと、そう申し上げたいからではありません。キリスト教会に限らず、私たちの国において宗教を取り巻く環境が著しく悪化しているのは言を俟つまでもありません。しかし、そのような状況下で、カルトと肩を並べ、なり振り構わずに信徒獲得競争に名乗りを上げることが私たちのすることでもありません。むしろ、そういうところからは、あえて距離を置くのが私たちの立ち位置だと考えます。しかし、だから、何もせず、黙ってじっと座っていればいいのかということ、そうではありません。この状況の中で、私たちは間違いなく変わる必要があるのです。では、私たちはどう変わるべきなのか、そのために求められていることが、去年よりも今年、今年よりも来年と、希望は増し加えられていっているとの感覚を持つことです。ところが、それについては、いささか心許ないと、もしかしたら、それが皆さんの率直な思いなのではないでしょうか。なぜなら、数字がすべてを物語っている以上、希望が増し加えられていると語ることは、誤魔化しであり、偽りであるとも言えるからです。けれども、御言葉の語る希望とは、数字で言い表せるものなのでしょうか。もし、数字だけがすべてであるとしたら、希望というこの言葉は、私たちも冷ややかに受け止めざるをえないのですが、けれども、そうではないことを私たちに伝えてくれているのが御言葉であり、私たちに与えられている福音でもあるのです。なぜなら、イエス様の十字架と復活の出来事についてを数字で評価することはできないからです。

ですから、御言葉が私たちに伝える希望というこの言葉を、私たちがもし、数の上でのこととしてのみ理解しているのだとしたら、変えるべきは、その意識、考え方そのものでもあるのでしょうか。なぜなら、神様が与えられる希望とは、数字で表し、そ

の数字をあれこれ評価するものではなく、むしろ、そのような人の手垢に染まることを神様が良しとされてはいないものだからです。ただし、だから、私たちが数字を用いてはならないということではありません。数字に一喜一憂し、数字に左右されるということはつまり、私たちが数字を拝んでいるに等しいことであり、言ってしまうと、数字という偶像を拝むに等しいことでもあるからです。しかし、その一方で、私たちの足下は危うさを増しても言っているのも確かなわけですから。そして、私たちの信仰とは、やせ我慢することでもなく、また、空元気でいることでもなく、この危うさに寄り添ってくださるイエス様のことを実際に見つめるものである以上、その私たちが具体的に励まし、支えてくださることがなければ、そもそものところで信仰が成り立つこともありません。ですから、この神様の助けを私たちは待ち望み、実際に手にする必要があるのですが、では、この神様からの助けというものは、私たちに与ってはまったく未経験なものなのでしょうか。

この日の御言葉の少し前で、御言葉が「私はあなたを僕として、ヤコブの諸部族を立ち上がらせ、イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして、私はあなたを国々の光とし、私の救いを地の果てまでもたらす者とする。」と語ったのは、バビロン捕囚の最中に置かれたイスラエルの人々に対してでありました。ただ、人々がこの言葉を耳にしたのはいつなのか、それは、事が成る以前のことであります。つまり、それは、到底希望と呼べる代物ではなかったということです。ところが、このお言葉の通りに、神様はイスラエルを解放し、乳と蜜の流れる地、エルサレムへと人々を連れ帰ってくださったのです。しかし、50年をへて戻った故国は、すべてが荒れ果て、しかも、彼らにとっての精神的柱であった神殿はその形すら留めてはいなかったのです。それだけではありません。夢にまで見た故国での生活を始めるためには、すべてのことを一から、いや、ゼロから始めなければならなかったのです。そして、その彼らに対して、神様が先ず求めたことが、安息日を守ることと神

殿の再建であったのです。

そこで、彼らはこの神様の御心に懸命に応えようとなりました。そして、紀元前515年に第2神殿は完成し、こうして、彼らは神様の御前にあって面目を施すことになったのです。そして、この日の御言葉は、そんな彼らに向かって語られたものでもあります。そこで御言葉はこう語ります。

「私の選ぶ断食はこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられたひとを解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さ迷う貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。」と。つまり、その信仰の体裁は整えられたとしても、それは、実の伴わないものであったということです。なぜなら、そこかしこにあるものは、虐げられた者、飢えに苦しむ者、貧しさに喘ぐ者の姿であったからです。

こうしてイスラエルは神様の御心からは大きく外れることになったわけですが、恐らく、この状況の中で希望を語ることは虚しいばかりのものであったのでしょうか。ですから、衰退期を迎え、足下に火がついている私たちにとっても、それは他人事ではありません。しかし、それにしても不思議なことは、神の民にとっては、不利益な情報でしかないこの情報をイスラエルがどうして後世に残そうとしたのかということでもあります。それは、彼らがそこに信仰の原点を見たからです。そして、この原点とは、8節に「あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る」とあるように、信仰に生きる民を、信仰に生きるがゆえに神様が見捨てずに守ってくださっているというこの経験です。まただから、彼らは、神様が先になって、後になって守り導いてくださっているとの思いを強めることになったのですが、御言葉は、彼らのその気持ちを「あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば『わたしはここにいる』と言われる」とこの言葉をもって語るのです。そして、そこから明らかにされることは、神様とイスラエル、神様と私たちの関係性とはそのように近いということでもあります。それゆえ、希望とは、この神様と私たちとの関係性の近さに

よってもたらされるものであるのです。

従って、この近さを去年よりも今年、今年よりも来年と、日々積み重ねながら歩んでいるのが、こうして御言葉に聞いている私たちであります。ですから、その私たちにとって、希望の光は106年前と比べて、その時よりももっと大きくなっているはずなのです。それは、この100年あまりを振り返れば分かるように、私たちがこうして途絶えることなく歩み通せたこと自体が、そのことを物語ってもいえるとも言えるからです。ただ、私たちがそう言えるのは、私たちのこの100年余りの歩みに何一つ陰りがなかったからではありません。

「藤沢教会百年史」をご覧いただければ明らかのように、そこには伏せておきたい内容が記されております。しかし、それは、この日の御言葉にもあるように、私たちだけではありません。イスラエルもそうでしたし、世にある教会のすべてがそうなのです。けれども、それでも神様を信じ信頼して歩み続けてきたのが私たち主を信じる群れなのです。そして、私たちにそれを可能とさせたのは、私たちが深き淵に立ち続けることを止めることがなかったからです。ですから、藤沢教会の教会あり方、その信仰のあり方とは、この深き淵に現されているとも言えるのですが、まただから、神様は、その私たちに向かって「あなたの光は、闇の中に輝き出で、あなたを包む闇は、真昼のようになる」と語るのです。

しかし、この御言葉の語るどころはどうかということなのでしょう。それは、だから、私たちがその信仰をもって輝かなければならないということではありません。バビロン捕囚後のイスラエルのように、自らの力で自らを輝かせようとする試みは、時に失敗に終わることが多いからです。けれども、そのような中で養われてきたものが御言葉の語る信仰であり、神体験でありました。ですから、私たちは自らを輝かせようと、あくせくする必要はありません。御言葉を信じ信頼しつつ、深き淵に佇むしかない私たちのことを、神ご自身が必ず輝かせてくださるのです。なぜなら、私たちは、神の時間を生きているからです。

それゆえ、神の時間を生きる私たちは、時の流れの中で消え失せていくようなもの

ではありません。私たちの生きる神の時間とは、神の恵みが実を結ぶ時間であり、神の恵みの中で私たちが成長していく時間であるのです。だから、そういう意味で、虚勢を張る必要はありません。ただ、うっかりすると私たちは、自分が大きく目立つ看板になることが私たちの信仰だと、そう勘違いしてしまうことがあるのです。けれども、神様の時間を生きるということは、私というものを大きく大きく見せようとするのではなく、非力な自らを見つめつつ、そこに働きかける大きな力を感じ、日々歩み続けることなのです。そして、その私たちを包み、また覆ってくださっているが私たちの主イエス様というお方なのです。ですから、闇が深まれば深まるほど、私たちが小さく小さくなればなるほど、イエス様は私たちの中で大きく大きく輝き、その私たちをして世を照らし出してくださるのです。神の時間に生きる私たちとは、そのように神様に生かされ、また用いられているものなのです。このことはつまり、暗い現実を乗り越える希望の世界に、あるいは、そのような希望あふれる時間を、教会という小さな群れは生きているということです。そして、今も、そして、これからも、それが私たちを通して続いていくことなのです。それは、主なる神様が、イエス様が私たちのすぐ近くに共にいてくださっているからです。ですから、106年前の人々と比べて、この思いを大きくしてきたのが私たちであり、それゆえ、希望は私たちの中で確実に大きくなっているのです。そして、それが「主が共にいます」ということであり、ここに置かれているものが私たちの信仰の原点であるのです。従って、この私たちの原点にしっかりと立ち、これからも関わるすべての人々と主の愛を分かち合い続ける私たちでありたいと思います。祈りましょう。